

2016年度

国

語

注意

1. 問題は全部で15ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
---	----------------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

— 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

浅草木馬亭で、松尾貴史の『はてなの茶碗』を聞いた。米朝型に雲上人の声色が入ったりする演出。もとより松尾はプロの落語家ではなく、おそらくは米朝の聴き覚えであるはずだが、これが普通に、という言い方は失礼かもしれないが、これといった破綻もなく、ほころびも見えず、かといって一昔前の素人落語によくあつた入れ事過多の不自然さもなく聴けるのだった。バランスがいい。

桂米朝のあまたある功績のうち、誰しもが言うのは、上方落語現行演目の大多数のテキストが彼によって整理、構成されたものであるということだ。これは米朝自身の文章に詳しいが、彼は継承断絶の危機にあつた上方落語の内容を現代に合うように改訂し、演出し直し、あるいは途絶えていた演目を復活— というよりは事実上創作し、一門の枠を越えて上方落語界に定着させた。

演目の「こしらえ」かたが高水準であつたために、たとえ素人がテキスト丸覚えで披露をしても、それが聴けるものになっている、という人もいる。私も、先の木馬亭の客席でそれを確認した。

しかし、これは、実は不思議なことなのである。落語において、よく出来た構成演出をした落語家— たとえば三代目金馬や三代目三木助や圓生、八代目文楽等の落語テキストがここまでの汎用性を持つかと言えば、持たないからである。

かりに、三代目金馬なり八代目文楽の落語を玄人素人問わず、あとから来た者がそっくりに演じた場合、その精度が高ければ高いほど、それは声色(物真似)の領域を出なくなってしまう、とうてい聴けたものではなくなる。金馬の傑作『居酒屋』が、その見事な完成度ゆえに、テキストとしては継承されていない事実を思い出してみよう。

しかし、右の例とは反対に、米朝落語に限っては、〈完コピ〉が有効に機能する。

それはなぜだろうか？

落語という芸能は、(江戸)と安直に結びつけられることが多いが、実際にいま現在、私たちが耳にしているのは明治時代から大正時代に完成した近代落語にはかならない。落語の歴史は四〇〇年と言われるが、それは中世末期ないしは近世初期に存在した語り手(お伽衆や僧侶)を開祖と見なした年表であり、あるいは寄席というものが成立した約二〇〇年前を基準としても、単純に当時の口演内容の延長線上にいまの落語があるとはいえない。落語は固定化した台本、演出を持つとうしなかつたからである。^{*}近松半二の浄瑠璃や、謡曲や長唄が正本(詞章)とともに伝承されているのはそこ³がちがう。

明治期、大正期の速記本の記録を見てもわかるように、当時の演者は、落語の世界を同時代の感覚で描いている。これは、はつきり近世期を背景としている噺でも同じことで、語り手はモチーフこそ江戸にとりながら、噺の中の世界を自分の暮らす空間に引き寄せて語る。

^{*}三遊亭円朝にはじまる落語の速記が近代文学の成立に大きな影響を与えたと一般に言われるが、より正確に言えば、近代空間が産み落とした双子の片割れが正岡シキ、夏目ソウセキらによって高度に整えられた(散文)であり、もう片方が(近代落語)であつたというのが私の見立てだ。

新宿の廓を舞台にした『文違い』で、志ん朝はやりとりする金銭を数十円に設定し、安っぽい色男は人力俵に乗って去っていく。同じ噺を十代目馬生は「両」の金額にし、男は「駕籠」で去っていくことにしていた。馬生はすぐれた演者であるけれども、この二者に関しては、圧倒的に志ん朝の設定のほうがいい。なぜかといえば、近代落語は近代という(神なき時代)によるべなく生きるほかない個人に焦点を合わせ、その姿を描くことを要諦⁴としているからである。だから、からからと車輪を回転させて走り去る人力俵のイメージが効くのだ。

若き日の米朝は、『替り目』で酔客が乗る人力俵をタクシーに置き換えて演じていたが、米朝のこの姿勢は、たとえば三代目金馬が『死神』の舞台を戦後に移し、交通事故やメチル酒事故をストーリーリーにからめていたりする行き方と同じといえば同じである。ただし、金馬のそれがまことに屈託なく、楽天的な演出であるのに対して、わたしは米朝の口演に、薄氷を踏むような慎重⁵

さを感じないではいられない。『替り目』ほど極端なケースは少ないが、米朝は先人たちがそうしたように、落語の内容を同時代の感覚に近づけるよう、微調整を試み続けた。

しかし、二者択一的に言えば、米朝はある時点で、落語の内容と語り手が地続きの關係を持つことを断念したのである。⁶

米朝ほどに、能楽や狂言、歌舞伎や文楽等の他ジャンルの古典劇を研究し、実演者と密接な親交を結んだ落語家はまれである。⁷

米朝が先行する芸能をよく研究した理由は、単純に芸事が好きだったからとも、落語を演じるための教養として吸収したかったからともとれるが、私はこう考える。落語よりも早く、同時代と分岐した芸能のあり方を、古典落語の演じ手である桂米朝は学びとり、そのうえで芸能の長大なタペストリーの中に、落語を早く編入する必要があったからだ、と。

私は以前、米朝の方法を落語の「作品化」⁷だと書いたことがある。

それはこういう意味である。

落語よりも早い時期に古典化の道を選んだ芸能は、演目の内容と演者の実感が断絶していることを前提としている。具体的に、歌舞伎役者は源平合戦や本能寺の変の実感を持つ必要はなく、能役者個人は神仏信仰を持たずとも、あえて言えば無神論者であったとしても「高砂」や「三輪」の能を舞う。そのとき、レパトリーは演者の実感から切り離され、額縁に入った「作品」になる。額縁は作品を保護するものであり、同時に作品と社会とを隔絶するものでもある。そして作品は、美術館や静謐な個室内において鑑賞可能な対象となる。

これが私の言う「作品化」である。

米朝の『らくだ』は大阪の下層社会の実感をそのまま表現したものではない。人形浄瑠璃の六段目の勘平腹切の舞台美術が、見苦しきあばらやといっても、写実表現をとらないのと同様、ある種の濾過された空間ではなしが進むのだ。^エ

謡曲や義太夫の台本をいくら整理編集して上演したとしても、そこに近代劇が出現するということはない。近代劇は前近代の台本を煮詰めた結果に現れるものではないからである。この比喻に従って続けられれば、従来の上方落語をいくら整理しても、そこに（米朝落語）が現れることはなかったはずである。

桂米朝が米朝落語を完成させることが出来たのは、落語がまだその段階にある演目と演者の結びつきを断ちきつたからである。そのとき、はじめて落語は密教的な玄人性を離れ、誰もがアクセス可能な「作品」になったのである。

彼の落語の本質的な新しさはここにある。つまり演目それぞれの高度な整理を可能にする、演者と演目のクールな緊張関係、その両方を視野に入れる観客とのトライアングル、その構図のデザインこそが、米朝以前にはなく、かつまた今日まで更新されていないものである。

（和田尚久「桂米朝の構図」による）

〔注〕

*松尾貴史（一九六〇）。タレント・俳優。

*『はてなの茶碗』古典落語の演目。以下、本文中の二重カギカッコはみな落語の演目名。

*米朝 桂米朝（一九二五～二〇一五）。上方の落語家。落語家で二人目の人間国宝。

*入れ事 元の話にはない台詞や所作を挿入すること。

*三代目金馬や三代目三木助や、いずれも大正から昭和にかけて活躍した落語家。

*近松半二 江戸時代中期の浄瑠璃作者。

*三遊亭円朝 幕末から明治にかけて活躍した落語家・落語作者。

*志ん朝 古今亭志ん朝（一九三八～二〇〇一）。戦後に活躍した東京の落語家。

*十代目馬生 金原亭馬生（一九二八～一九八二）。戦後に活躍した東京の落語家。志ん朝の実兄。

*「高砂」や「三輪」||どちらも能の演目。住吉の明神や三輪の明神が登場する。

*勘平腹切||「忠臣蔵」六段目の、浪人早野勘平が罪を責められて腹を切る場面のこと。

問一 傍線部1「雲上人」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 。

① 神や仏

② 京都に住む古物商

③ 皇族や公家などの高貴な身分の人

④ 法服を着た僧侶

⑤ 物真似などの芸人

問二 傍線部2「汎用性」について、

ア 読みを平仮名で記せ。問二アは解答用紙(その2)を使用。

イ この語の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 。

① いつまでも永続すること。

② 高い価値を持つこと。

③ 誰にとってもわかりやすいこと。

④ 幅広く活用することができること。

⑤ 平凡でつまらないこと。

問三 傍線部3「そこ」の指示内容として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 3。

- ① 落語には、固定化した台本や演出がないということ。
- ② 落語は伝承されたものではなく、すべて新しく作られたものであるということ。
- ③ 落語は、浄瑠璃や謡曲、長唄とは演じられる場所が違うということ。
- ④ 落語には、浄瑠璃等にはないストーリーがあるということ。
- ⑤ 落語は浄瑠璃等とは違い、演者が台本を手に演じないということ。

問四 波線部の人名、ア「シキ」、イ「ソウセキ」を漢字に改めよ。問四は解答用紙(その2)を使用。

問五 傍線部4「要諦」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 4。

- ① 避けるべき要素
- ② 中心的な主張
- ③ まとまった内容
- ④ もっとも大切な点
- ⑤ 理想の目的

問六 傍線部5「薄氷を踏むような慎重さ」とあるが、これはどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 5。

- ① 話のどの部分に同時代的な感覚を持ち込むか、考え抜いた演出を行った。
- ② 同時代の感覚を取り入れていくだけに、聞き手を傷つける表現を用いないように配慮を怠らなかつた。
- ③ 同時代の感覚をできるだけ正確に取り入れるように、神経質とも言える調整を行った。
- ④ 演じ方を同時代の感覚に近づけようとしつつも、細心の注意を払ってそれを行おうとした。
- ⑤ 話の内容に演者自身の感覚を持ち込むことに消極的で、持ち込む際にもこわごわ演じていた。

問七 傍線部6「落語の内容と語り手が地続きの関係を持つことを断念したのである」とあるが、この語句の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 6。

- ① 単なる語り手に徹して、落語の内容に手を入れることをやめた。
- ② 落語の話の中に、語り手が登場することを自ら禁じた。
- ③ 落語の話の内容に興味を持って演じることを思いついた。
- ④ 落語を現代と切り離し、江戸時代の古典として演じる方向へ舵を切った。
- ⑤ 落語の内容を、演者の同時代的な感覚に基づいて演じることをあきらめた。

問八 傍線部7「落語の「作品化」とはどのような意味か。その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 7。

- ① 歌舞伎や能と同じように落語の詞章の完成度を高め、芸能としての形式を確立すること。
- ② 落語の内容を写実的なものにせず、歌舞伎や能と同じように様式化された空間を形成すること。
- ③ 落語の内容を演者の実感から切り離し、観客が距離を置いて鑑賞することが可能な対象にすること。
- ④ 落語を社会から切り離し、美術館の中でのみ鑑賞されるような芸術品に高めること。
- ⑤ 落語の内容を額縁に入れるように固定化し、演者による工夫の余地がないようにすること。

問九 波線部ウ「静謐」、エ「濾過」の読みを平仮名で記せ。問九は解答用紙(その2)を使用。

問十 傍線部8「密教的な玄人性」のここでの意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は

8。

- ① 江戸時代以来傳承されてきた思想的世界。
- ② 額縁に入れられた、現代とは切り離された世界。
- ③ 神仏思想と結びついた古典芸能の世界。

④ 専門的な修練を積んだものでなければ演じられない芸の世界。

⑤ 難解な、専門家だけが理解できる学問的世界。

問十一 落語について述べた本文の主旨と合致しないものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄は 9。

① 能や歌舞伎等の古典劇は、早い段階で演者との同時代的なつながりを断ちきることで生きのびてきた。

② 落語は一般に、先人とそっくりに演じても有効には機能しない芸能である。

③ 落語は固定化した詞章を持たないがゆえに、演者の同時代の感覚を持ち込んで演じざるをえない芸能である。

④ 近代落語は、近代という〈神なき時代〉を生きる個人に焦点を合わせて表現されている。

⑤ 落語は、能や歌舞伎と違って、演者の時代に引きつけて演じることが禁じられている。

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

世の諺に商人と屏風はすぐてはたたずといひし、むべなるかな。さはいへど利分あるをなき顔に、しらじらしくいひのしらんは、我ながら恥かはしき心ちぞせむ。いつのころほひにかありけん、伊勢の松坂の町に富裕の人あり。名はさだかならず。はるけき東の都に店をかまへ、からのやまとの絹巻物、四季折々の衣服、夜を追ひ日をかさねてくだす家にし侍れば、誠に時めく粧ひなりし。娘ひとりもてり。年は十五にひとつふたつばかり、おもざしたぐひなく、貴妃の笑み、西施が百の媚ある粧ひをそねむばかりなれば、恋しのお者多かりしが、ある日いとかりそめの風邪の心ちといひていたはりしに、父母したしき人々驚き、医師を頼み薬術手を尽し、神に祈り仏にかこつにしろしなく、惜しや無常のあらし、つぼめる花をちらして、やよひの中の五日つひにむなしくなりてければ、父母のなげきはさらなり。よその哀れも今さら袖をひたしぬ。なきがらはけうとき野辺に送り捨て、七日七日のあとねむごろに弔ひたまひし。

されば行く水の流れはやく、月日またおなじき習ひなれば、悲しかりし年もくれて、又のやよひは一周忌の追善など催しける夕べ、怪しき僧ひとりたたずみ、「何やのたれはこれにて侍らずや、あるじに対面申したき事の候ふ」といふに、亭主立ち出で、「いかなればかく御尋ねあるぞ」といへば、「さればこそとよ、我はこれイツシヨ不住の僧にて、諸国を修行いたし侍る。去りしとしの水無月ころは、白山禪定し侍るに、山なかばにてとしのころ十六ばかりなる娘、この僧を呼びかけ、『恥づかしながらわらはは、伊勢の松坂の何がしが娘千世と申す者に侍り。かうかうの事に病づきてむなしくなり侍りしが、日ごろ人に恋ひしのかれし罪障の山霧ふかく、行くべき先も見えず、かく中有の旅に迷ひ侍る。今たまたま諸国修行の御僧と見奉りて頼み申すに侍り。相かまへてこの事を語りつたへ、なき跡をとほしめ給へ』といふ。『さるにても何をもつてか、君にあひける証拠とし侍らんや』といへば、懐より白き着物の縫ひあるかた袖とり出し、『これこそ自らが心に入れて、日ごろ秘蔵しける執心つよく残りて、かた袖をとり帰りに、今身に随へ侍り。この残りはそのその長櫃の中にあるべし。これを証拠に申させ給へ』と、かた袖を渡しかきけちてうせぬ。これ御覧あれ」とさし出す。手にとるに、げにも娘の秘蔵しける小袖なり。

教へし長櫃ながびつのふたを明け、とり出でてみるに、かた袖はちぎれて跡ばかり残り。この時にこそひとしほ驚き、「さては疑ふべくもなき我が娘にて侍り」と、父母もろとも今さらなげき悲しみあひける。「時しもこそあれ、けふ一周忌の夕べ、かかる事を聞くといひ、目のあたりこの奇特6を御覽ありし御僧なれば、誠の生き仏にこそ侍れ。これにしばしおはして、なき跡をも弔ひ、われわれをも教化し給はれかし」といへど、「末はるかなる修行の旅なれば、心いそぎ侍る」などいひて、立ち出づるを引きとどめ、「是非7さやうにおはしまさば、娘、成仏の追善、いかならん事をもなし給はれ」と、黄金取り出し、僧に与ふ。僧、これを受け取りて、いとまごひ出で行きぬ。

この家の手代*、何がしとかやいふ才智発明の男、始終この物がたりをば聞きあけるが、いといぶかしく跡について、僧をしたひ行く事二里余、こなたなる在所のある家に入りしを、かたへの窓よりさし覗のぞけば、死に給ひし娘の腰元*ツタといへる女、少し子細ありて、とくに追ひ出されしが、ここにありと見ゆ。僧はこの者が夫なりしが、世わたらひ貧しく、ふたりもろともかか8るはかりごとをなしけると見えしほどに、やがて家に入りて、二人ともにとらへ糾明しけるに、ことごとく顛あはれけり。

くだんのかた袖は、腰元、かの家を追ひ出されける時、ひそかに引きちぎり出でけるとぞ。いとおそろしき心ばへにはありけり。かく跡がたもなきそらごとなれば、黄金をもとりかへしけり。げにこの御山にてかかる幽霊に逢ひけること、ままおほしといひつたへたれば、さもありません。それはまことこれは偽りにてありき。

〔諸国新百物語(御伽比丘尼)〕

〔注〕

* 仏にかこつ 〓 仏に嘆いて訴える。

* けうとき野辺 〓 人けのない埋葬地。

* 白山禪定 〓 白山での修行。石川、岐阜両県境にある白山は古くから信仰の地とされた。

* 縫ひ 〓 刺繍。

*手代Ⅱ商家の使用人。

*腰元Ⅱ女性の奉公人。

問一 傍線部Ⅰ「商人と屏風はすぐにはたたず」とあるが、この言葉はここでは商人のどんな特性を述べたものか、最適なものを次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は **10**。

- ① 商人は金もうけのことばかり考えず正直でなくてはいけない。
- ② 多くの場合商人は転んでもただでは起きない。
- ③ 商人は正直だけではやっていけないし、時には客の意に添うことも必要。
- ④ 商人は商談の折に即座に工夫をしなくてはいけない。
- ⑤ 概して商人は商談後すぐに席を立つようではいけない。

問二 傍線部Ⅱ「利分あるをなき顔に、しらじらしくいひのしらんは、我ながら恥かはしき心ちぞせむ」の現代語訳として、最適なものを次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は **11**。

- ① 利益があるのを、あたかもないかのごとくにそらざらしく声高に言うのは、我ながら恥ずかしい気分になる。
- ② 自分に理がないことを承知しながら嘘でかため、相手を大声で罵倒するのは、自分でも恥ずかしい気分となる。
- ③ 自分に利益があるのに、さながら世のため人のためなどと言いつるのは、他人事とはいえ白々しく見苦しいものだ。
- ④ 人と議論をする際に、自分に理があることをいいことに相手を罵倒するなどというのは、我ながら恥ずかしい心地になる。
- ⑤ 自分にも十分な利益があるのに知らんぷりをしてとぼけ、相手の強欲ぶりを罵るのは、自分でも恥ずかしい気分になるだろう。

問三 波線部「し」の中で一つだけ品詞の違うものがある。次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は **12**。

- ① 家にし侍れば ② 粧ひなりし ③ 多かりしが ④ いたはりしに ⑤ 巾ひたまひし

問四 傍線部3「西施」は楊貴妃と並ぶ中国の美人を指すが、西施にまつわる「顰に倣う」という成句がある。その意味として最適なものを次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は **13**。

- ① 傍若無人にふるまうこと
② むやみに他人のまねをすること
③ 自分の理想を追い続けること
④ 権力者に唯唯諾諾と従うこと
⑤ 年長者の言動を尊重すること

問五 傍線部4「イッショ」にあてる漢字として最適なものを次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は **14**。

- ① 一 所 ② 一 緒 ③ 一 書 ④ 一 暑 ⑤ 逸 書

問六 傍線部5「さるにても何をもつてか、君にあひける証拠とし侍らんや」の現代語訳として最適なものを次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は **15**。

- ① それにしても、よりよってなぜわたしに伝言を託すのでしょうか。
② ごもつともですが、あなたとお会いした証拠などどこにもありません。
③ それにしても、何をもってあなたと会った証拠とすれば良いのでしょうか。
④ そうは言っても、あなたが実在することをどう証明すればよいのでしょうか。
⑤ それはそうとしても、どういった方法であなたに会った証拠を入手しようか。

問七 二重傍線部 a ～ c の動作主として最適なものを次の①～⑤からそれぞれ選び、番号をマークせよ。

a 「とり出し」 解答欄番号は 16。

① 僧 ② 千世の親 ③ 千世 ④ 著者 ⑤ 手代

b 「さし出す」 解答欄番号は 17。

① 僧 ② 千世の親 ③ 千世 ④ 著者 ⑤ 手代

c 「手にとる」 解答欄番号は 18。

① 僧 ② 千世の親 ③ 千世 ④ ツタ ⑤ 手代

問八 傍線部6「奇特」とあるが、I「奇特」の意味と、IIここでの具体的な内容として最適なものを次の①～⑤からそれぞれ選び、番号をマークせよ。

I 「奇特」の意味 解答欄番号は 19。

① 密教の秘儀 ② 霊山の伝説 ③ 悲劇との対峙 ④ 神仏の御加護 ⑤ 不思議な出来事

II 具体的な内容 解答欄番号は 20。

- ① 長櫃の中にも同じ小袖があったこと
- ② 見ず知らずの僧の無欲で猥褻的な行為
- ③ 生前娘が語っていた商人の強欲への戒め
- ④ 成仏できない娘の死体が白山にあったこと
- ⑤ 死んだ娘の託した片袖が本物と証明されたこと

問九 傍線部7「さやうにおはしまさば」とあるが、どんなことに配慮したのか。最適なものを次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は 21。

- ① 修行の旅をしている身ゆえ、この家にとどまれないという事情。
- ② あまり長居をして話をする、嘘が発覚してしまうという事情。
- ③ 修行僧ゆえに、すべてのことに上司の許可が不可欠という事情。
- ④ あまり多額の金銭を受け取るのは、仏の教えにそむくという事情。
- ⑤ 現在修行中のために金がなく、接待されるよりもお金が欲しいという事情。

問十 傍線部8「かかるはかりごとをなしける」とあるが、「はかりごと」の具体的な内容は何か。最適なものを次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は 22。

- ① 妻のツタが予め盗んでおいた片袖を用い、千世の親をだまして黄金を得たこと。
- ② 店を追われた恨みを晴らすために、千世に成りすまして旧主人をだましたこと。
- ③ 才智発明の手代と僧を語らい、千世の親に近づき大金をだまし取ったこと。
- ④ 自分を辞めさせた店に復讐するため、僧を語らい旧主人から黄金を奪い取ったこと。
- ⑤ 主人の娘・千世を殺し、奪った片袖を用いて大金をだまし取ったこと。

問十一 傍線部9「それはまことこれは偽り」とあるが、具体的には何が「まこと」で何が「偽り」なのか。最適なもの^を次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は **23**。

① 白山に出る幽霊は「まこと」。松坂に出る幽霊は「偽り」。

② 娘を思う親の心は「まこと」。ツタと夫が企図した詐欺話は「偽り」。

③ 幽霊の存在は「まこと」。「商人と屏風はすぐにてはたたず」という言葉は「偽り」。

④ 白山に幽霊が出るといふのは「まこと」。片袖を利用した今回の詐欺譚は「偽り」。

⑤ 幽霊の存在は「まこと」。才智発明の手代が存在することを見抜けなかつたことは「偽り」。

問十二 本話の内容として間違っているものを一つ次の①～⑤から選び、番号をマークせよ。解答欄番号は **24**。

① 千世は三月十五日に亡くなった。

② ツタと、怪しき僧は夫婦だった。

③ 千世が亡くなったので、ツタは暇を出された。

④ 怪しき僧が持ってきた片袖は、千世のものだった。

⑤ ツタ夫婦の企てを暴いたのは、千世の家の手代だった。